

防災だより

創刊号

平成 27 年 11 月 8 日発行 小田急金森泉自治会先守防災隊

はじめに

深秋の候、小田急金森泉自治会員の皆さまにはますますご清祥のこととお慶び申し上げます。平素は地域の防災・減災活動に、ご理解ご協力を賜りまして誠に有難うございます。

平成 24 年 4 月以来、私共先守防災隊は手探りの活動を進めて参りましたが、それらを通して私たちの地域における防災活動の方向性について、模索から半歩進んだ段階に差し掛かり、現状課題解決に向けた新たな組織やマニュアル策定等の検討に取り組んでいます。また、9 月に発行された東京都の小冊子「東京防災 (Yellow Book)」との整合性等も図りつつ進めています。

●発刊目的

前述作業成果あるいは中途段階でお示しするものは、主に防災活動の骨組み枠組みといったもので、細部におよぶ知識や例示を十分に掲載することや、社会的変化・政省令改変等を適時に盛り込むことは難しく、補うものがが必要です。また、年度防災活動計画や結果報告をする場も必要ですし、自治会員相互の防災に関する情報発信や交換の場を用意することも重要です。

以上のような趣旨を皆さまに適宜お届けする情報紙として、ここに「防災だより」を発刊することに致しました。

●活動予定

前述のとおり、新たな組織やマニュアル等の検討に取り組んでおりますが、前提となる「目指す」ところをこの創刊号で皆さまにお示しし、今後提案する種々活動の方向性や内容等を含めて、皆さまのご意見を伺いつつまとめていきたいと考えております。

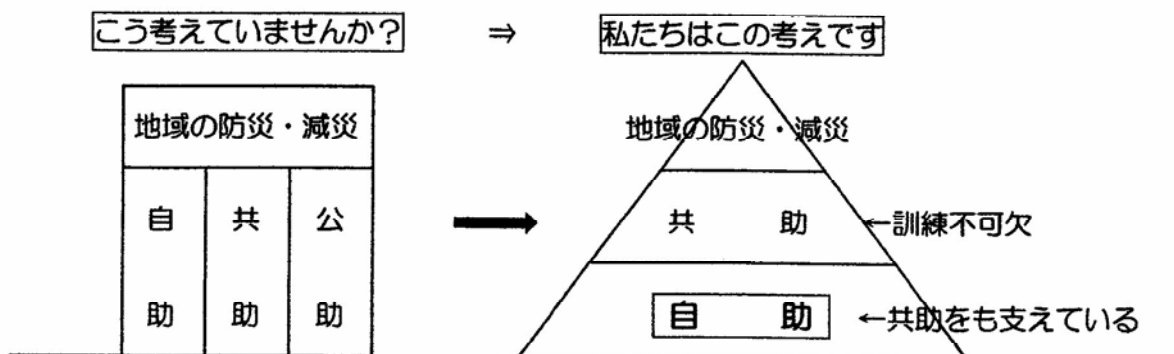
何を指すか

●大震災への対応を念頭に！

大地震は、突発性・広範囲性・被害の甚大性・各種対応の必要性等があり、さらに他の災害対応への応用性も持っていることから、これを念頭においた防災活動に取り組めます。

●自助・共助・公助の関係とは？

- ・自助 → 個人が日常取り組む減災への「心構え・物・情報」の備えで、近所付合いも含む。
- ・共助 → 皆で協力して行う活動で、訓練が不可欠であり、参加により人のつながりができる。
- ・公助 → 消防、救急等は、しばらく機能しない。(大震災直後～数日?)



●自治会員全員が防災隊員です！

自助なくして共助なし！ が私たちの防災活動の原点です。

前回の自助がすべてを下支えするので、自治会員全員が防災隊員であり、その意味は次のとおりです。

- ・発災時にけがをしたり家具の下敷きだったら → その方は家族も近所も助ける側に立ってない。
- ・一人一人が災害に備え平時に減災活動に取り組む → よって、自治会員全員が防災隊の一員。
- ・心構えが一番大切 → 被災者にならない、または被災を少なくする平時の気持ちと行動。
- ・訓練に参加し、適切な行動・知識を身に付ける → 顔見知りが増えて人のつながりが強くなりいざという時にものを言う。

以上、出発点は「自分の命は自分で守ろう」ですが、

本当に助けの必要な方へのサポート力が高まる等、地域全体の防災力を高めます。

●自助を見える化します！

誰でも、けがをしたり、命に関わる経験は御免です。また、「そんなことになったら・・・」と不安になります。あるいは、不安から逃れるために被災しないことにしたり、考えないようにします。さらに、いつのことか分からないから、そのうちとか、面倒だと考えます。

→ そこで、次のような自助プログラムを作り、みんなで取り組みます！

- ・備えの実態をアンケート調査し、全体の傾向を整理して結果を公表、取り組みの参考にする。

(繰り返し調査により進捗等を確認)

- ・備えの知識、情報等を、アンケート結果も踏まえて適宜提供する。

なお、現状把握のため、このアンケートを只今準備中です。

●訓練の実施

いざという時のために、各種訓練が不可欠です。手順を習得したり、知識と技量を身に付けることが主な目的ですが、あらかじめ決まった人だけが出来るのでは、その人がいないだけで全く機能しなくなります。誰でも知っている、誰でも出来るレベルを目指し、忘れないために繰り返し訓練を実施します。

以下は、主要な訓練例ですが、当自治会主催の他、町田市等の外部主催や協力を得て実施するものも対象です。

- ・世帯別構成員等調査、避難訓練の班長等机上訓練、全体の避難訓練 → 毎年
- ・初期消火訓練（消火器、バケツリレー、スタンドパイプ等） → 年数回

など

以上

自らを守ることで地域が守られ、地域を守ることで自らが守られる！

地震体験

14班 井上 史郎

三回の震度5以上の地震を体験しました。その体験と自宅で行っている備えを中心に書かせていただきます。

プロの防災士ではありませんし、皆さんが既に行っておられると思いますが参考になりましたら幸いです。

東日本大震災

2011年（平成23年）3月11日（金）14時46分 震度5弱

私はその時東京ビッグサイトの展示場内にいましたが、大きな揺れが長く続きました。最初に心配したことは天井板の落下ですが、予想したように天井板の一部が落下しました。昔の建物の天井板はつり天井が多かったので、咄嗟にそれがひらめきました。天井を支える会場の出入り口へ移動、大きく揺れましたがなんとか立っていられました。会社ではキャビネットが倒れないように支えたと、後から聞かされました。自宅では大きな音がしましたが、物が落下するようなことはありませんでした。

三陸はるか沖地震

1994年（平成6年）12月28日 震度5強、震源の発生場所が浅く場所により震度6を計測。仕事を終え旅館に帰る夜の9時過ぎでした。最初は鳥が一斉に鳴き始め、ついでゴーという大きな音とともに揺れが始まりました。身体を支えていることができません。近くの電信柱に夢中でしがみ付きましたが、冷静になるとこれは間違いだと気付きました。電線が切れて垂れ下がった線に触れば、感電して死ぬ恐れがあったのです。

宮城県沖地震

1978年（昭和53年）6月12日 17時14分 震度6

この時期の大都市地震以降建築基準法が改訂され、震度6強でも倒壊は免れるような耐震性を検討する大きな契機になった震災です。ブロック塀に鉄筋が入れられることにもなりました。この時、私は社内の自分の机にしがみつき、啞然として揺れの収まりを待つだけでした。外に出てみると学校のプールの水が揺れ動き、グラウンドは水浸しになりました。当時市内の大きな新築の一軒家をお借りして、家族と暮らしていましたが、なんとか夜の11時頃に帰宅し、家の中を見渡して息をのみました。6畳の部屋にタンスを3棹入れてあり、そこには幼稚園児の娘が休んでいました。妻の最初の行動はその娘を抱きかかえ、大きな部屋の真ん中に移ると娘をしっかりと抱きしめて座り込み、じっと揺れの収まるのを待つことでした。静かになった時、床の間の壁がスローモーションのように崩れ落ちたそうです。伯母は外に出て見たものの、余りの量の瓦の落下で軒下に腰を抜かして身動きがとれなかったそうです。壁が崩れ落ち、浴室からも骨組みだけの台所を見ることができました。3棹あったタンスはバラバラに壊れ、1棹を残しあとは廃棄しました。一番惨めな部屋は台所で、割れた食器類が散乱し足の踏み場もない所に味噌と米が混ざり合っていました。玄関ホールの壁板は釘が抜け落ち、外れていました。当時未だブラウン管のTVは、部屋の中を三段跳びのように飛んで動いたそうです。ロウソクの光で夕食のおにぎりを皆で分け合い、掃除をして何とか寝場所を確保しました。電気・ガス・水道・電話すべて不通になり、飲料水はご近所の井戸を使わせていただきました。しかし、濁りのため布で濾して3日間ほどバケツに溜めてから使う状態でした。トイレの水はお隣のきれいな水路から頂きました。水はどんな時にも一番必要なものです。卓上コンロ・ガソリン用ランプがあり、簡単な食事自宅で作れ、とても助かりました。援助物資は、一週間後に家族6人でビスケット一袋と、歯ブラシが一本だけ配給されました。被災後の復旧にはガスを除き一週間を要し、ガスは10日程で使えるようになりましたが、市内の場所によっては一月程要したようです。

(裏へ)

昭和 40 年代初頭、多摩丘陵の南の外れに位置する小田急団地造成の際、高い所・低い所を平らにしたため、削られた地面と、盛り土された地面、亦その境の地面があり、地震の揺れと方向は大きく異なるようです。1978 年宮城県沖地震では、仙台市北部の泉区で住宅地の陥没・家屋の移動が起こり復旧に時間が掛りました。

2011 年の地震で大きな揺れが生じた箇所があれば、より丁寧な対応・注意が必要と思われます。

地震体験で学んだことは：

- 1 先ず自分の身の安全を第一に考えるということです。
- 2 次が家族の安全、その後ご近所の安否に繋がります。
家族内で話し合い、連絡手段、落ち合う場所など我が家のルールを決めることで安心感が生まれます。

我が家での備えは：

- 1 寝室には腰より高い物は置かない。
- 2 外に出る避難経路は二通り確保する。(玄関からと庭から道路に出るルート、バールがあると便利)
- 3 飲料水は一日一人当たり 3ℓ、7 日分の備蓄をする。
風呂にはいつも水をはり、ふたをする。
浴室に 20ℓ のポリタンク 3 本、水道水をキャップまで満たし保管。
(自宅で一番安全な場所は浴室だ、と施工の大工さんに教わりました)
屋外の物置にも 2ℓ ボトル 6 本入りを二箱、室内の地下に四箱を分散して保管。
- 4 食料は 7 日分を備蓄し使用したら買い足す。
- 5 常備薬の用意。

我が家の常備品目は：

- 1 アルミシート 213×137・ホッカイロで防寒対策と、うちわ・保冷剤で防暑対策
- 2 除菌ジェル・タオル・大小ビニール袋
- 3 万能サバイバルナイフ
- 4 スリッパ
- 5 10 円玉小銭と半月分位の生活費
- 6 軍手・マスク・笛
- 7 レジャーシート／ブルーシート (自宅トイレを作る時など)
- 8 石油ストーブ (電源コードの無いもの)
- 9 ローソク・マッチ
- 10 布製ガムテープ
- 11 卓上コンロ・燃料ボンベ
- 12 乾電池・懐中電灯・携帯ラジオ
- 13 クーラーボックス・保冷剤 (2~3 日分の食料を保存)

各ご家庭でできることから始めてみてください。備えあれば憂いなし、防災の第一歩です。